

平成 28 年度自治医科大学大学院看護学研究科 FD 活動のまとめ

1. 大学院看護学研究科 FD 研究会の実施

- 1) テーマ：大学院における授業評価方法
- 2) 日時：2017 年 3 月 6 日（月）9：00～12：00
- 3) 場所：大教室IV
- 4) 講師：自治医科大学 浅田義和先生
- 5) 内容

「大学院における授業評価方法について」の講義後、グループディスカッション1「自分達の教育実践への活用を考える」を行い、グループディスカッションの発表をワールドカフェ方式で行った。また、授業評価を組み立てるための方法について講義後、グループディスカッション2「授業評価を企画する」を行い、グループディスカッション後ワールドカフェ方式で共有した後、グループ毎の発表を行った。

6) 評価

アンケートによる評価を行った。参加者 22 名、アンケート回収数 20（回収率 90.9%）

(1) アンケート回答者の概要

大学院の授業を担当する教員 18 名、担当しない教員 2 名

(2) 授業評価方法についての具体的イメージ

具体的イメージがとてできた 7 名（35.0%）、できたが 13 名（65.0%）であり、あまりできなかったとの回答は無かった。

(3) 授業評価への活用

来年度の授業評価への活用ができるが 20 名（100.0%）であった。大学院の授業を担当していない教員からは大学院では活用できないが、学部の授業評価に活用できるとの意見があった。

(4) 授業評価についての課題

授業評価についての課題を見出すことに役立つ 19 名（95.0%）、無回答が 1 名であった。

(5) プログラムの適切性

プログラムがとて適切であるが 9 名（45.0%）、適切であるが 10 名（50.0%）、やや適切でないが 1 名（5.0%）であった。やや適切でない理由として、内容が多く 1 日コースが良かったのではないかとの意見があった。

2. 研究科長と大学院生との懇談会

年 2 回、講義・演習、研究指導、および学習環境について大学院生から意見を聞き、必要な対応を行った。

1) 第 1 回懇談会

- (1) 実施日時：平成 28 年 9 月 21 日（金）17:00～18:00
- (2) 実施場所：会議室
- (3) 参加者：前期課程学生 1 年 7 名、2 年 6 名（4 名欠席）
後期課程院生 1 年 1 名（1 名欠席）、2 年 1 名（1 名欠席、1 名休学）、
3 年 0 名（3 名欠席）

計 15 名

(4) 学生からの意見・要望

① 講義・演習、研究指導について

看護学部の授業を必要時聴講できるよう学部のシラバスや時間割を院生の研究室への設置、専門科目において教員との 1 対 1 の授業が多く、共通科目以外でも、もっと学生同士がディスカッションできる授業があるとよいとの要望が出された。

② 学習環境について

本や資料を置く場所や研究データの保管場所、スキャナー、男性学生用の臨時宿泊施設がなくシャワ

一室の設置、大学院教室研究室のセキュリティ強化の要望が出された。また、昨年度要望のあった研究室や教室の空調については改善され、夏も過ごしやすくなったとのことであった。

(5) 要望への対応

本や資料を置く場所については、ロッカー内にある本棚や空研究室を利用してもらう事も可能であり、必要な場合は申し出てもらうこと、研究データ保管場所については必要な大学院生に対して、博士後期課程研究室にある本棚の鍵を貸与するので申し出てもらうこと、スキャナーに関しては非常勤講師室の複合コピー機にスキャナ機能があること、男性学生用の臨時宿泊室と男性用シャワーの確保は難しいこと、大学院教室研究室のセキュリティに関しては個人に、各研究室の鍵を貸与することは可能であることを伝えた。

2) 第2回懇談会

(1) 実施日時：平成29年2月27日(月) 17:00~18:00

(2) 実施場所：会議室

(3) 参加者：前期課程学生2年6名(2名欠席)

(4) 学生からの意見・要望

① 講義・演習、研究指導について

特に研究計画を立て、研究計画支援委員会に提出する前に、教授との一対一の指導だけではなく、領域内の他の教員も入ったゼミや指導を受ける機会があるとよいとの要望が出された。

また、研究指導等について教員が学生の都合に合わせて調整をしてくれたことがよかったこと、仕事をしながらの学習であったが、理論と実践を結びつけることが楽しく、また学んだことを直ぐに実践に反映でき、具体的には文献を活用して実践に反映させたり、スタッフに実践の改善等について提案したりすることができたことなどの感想が述べられた。

② 学習環境等について

意見、要望は出されなかった。

3. 看護学研究科担当教員間の評価

平成28年度は実施しなかった。

4. 平成28年度 科目責任者による授業改善の取り組み

1) 博士前期課程

(1) 共通科目

科目名	科目責任者	授業改善の取り組み
看護管理・政策論	春山 早苗	無記名による自作の授業評価票により評価した。項目は「必修科目であることの意義が理解できるか」「授業内容及び授業スケジュールへの意見・要望」「授業全般の感想」とした。評価結果に基づき、次年度の授業改善内容を検討した。
病態生理学特論	北田 志郎	初回講義時に講義内容の要望を聴取すると共に、事前課題の振り分けを行った。その後も適宜授業内容について学生からの意見を聞き、以降の授業に反映させた。非常勤講師の授業終了後に講師からも意見を聴取し、科目全体の構成と授業間の連動について検討した。講義最終回には振り返りの機会を作り、次年度の授業改善に努めた。
フィジカルアセスメント特論	村上 礼子	学生の専攻分野を勘案して、非常勤講師と講義・演習の内容の洗練を依頼した。適宜、講義・演習内容や進め方、高度看護実践への応用性などについて、意見や要望を聴取した。出された意見などは非常勤講師にも共有し、次年度の授業改善に向けて検討した。
臨床薬理学特論	大塚 公一郎	各回の授業終了後に担当教員から意見を聞くとともに、学生より授業に対する感想・意見・要望等を聴取し、次年度の授業改善に努めた。

看護実践研究論	半澤 節子	オムニバスで展開するため、最初の講義担当教員は学生の臨床経験や研究動機などを一覧にし、また、教員の配布資料や学生のレポートはファイリングし、担当教員間で共有した。最後の講義担当教員は、これまでの授業に対する意見や要望を受け付け、次年度の授業改善内容について担当教員で検討した。
コンサルテーション論	永井 優子	履修者数が2名(科目等履修生1名を含む)のため、履修者間の調整が円滑にでき、学修が負担にならないように、また、科目等履修生の学修状況を確認して学修支援を含めて配慮しつつ、授業方法を検討した。例年通り、非常勤講師とは授業資料等について共有するとともに、担当回終了後には学生の反応と今後の対応についてともに検討した。また、毎回の授業終了時に学生からの質問を確認して、最終レポートにおける学び等を確認し、次年度以降の授業改善に活かした。
看護倫理	小原 泉	全15回の授業は、講義と演習の関連を再確認し、演習の教材を決定した。学生の反応に合わせて演習でのディスカッションテーマを柔軟に調整し、非常勤講師とも随時情報を交換して、学修課題の達成に努めた。各回の授業の際に学生の意見・感想を聞き、講義の理解度、演習課題の難易度や取り組み状況、有用性や満足度を確認して授業改善に努めた。
看護継続教育論	本田 芳香	科目担当者間で前年度の科目達成状況および取り組み状況を確認し、事前学習課題内容に反映させるよう努めた。科目担当者および科目責任者は、各授業終了後、学生の理解度や取り組む状況などの意見や感想をきき授業改善に努めた。科目終了後、科目担当者間で課題への取り組み状況や達成度についての意見交換をし、次年度の授業改善に向けて検討した。
地域医療論	北田 志郎	科目担当者と非常勤講師の講義内容を踏まえ、科目責任者の講義をそれらと連動するよう構成した。学生の勤務地または居住地、職歴に応じた事前課題を設定し、応用力・実践力の涵養に努めた。
地域調査法	渡邊 亮一	最終回担当の教員が受講者から授業内容や授業の進め方などについて意見や要望を聴取した。その結果に基づき、特に学習内容や学習方法が明確になるよう、特に次年度のシラバスを検討した。

(2) 専門科目

領域	科目責任者	授業改善の取り組み
小児看護学	横山 由美	各科目の途中で、授業の進捗や内容について学生に確認しながら進めた。また、学生からは最終授業終了後に感想や意見、学びについての課題を確認し、非常勤講師からは授業の最終日に学生の学びの評価や授業の改善点などを確認して、次年度の授業改善を検討した。
母性看護学	成田 伸 野々山 未希子	教育課程が38単位になって2年目の年であり、2年次の実習のみ開講した。実習は2年目でもあり、順調な進行を確認するとともに、次年度以降の改善に向けて検討を重ねている。母性看護専門看護実習の記録を分析する課題研究についても、2年目であり、順調に進行した。

クリティカルケア看護学	中村 美鈴	38 単位高度実践看護教育課程における授業の到達目標に対して学生の達成プロセスを把握しながら、適宜、授業の際に、授業内容や進め方、高度看護実践への応用などについて、意見や要望を確認しながら進めた。さらに科目担当者と到達目標や運用方法について振り返りを行い、学生に適したより良い教授方法を検討し、授業改善に努めた。
精神看護学 (旧カリキュラム)	半澤 節子	学生の進捗状況を確認しながら、必要な助言を行った。また、学生から研究指導に対する意見や要望を適宜確認しながら、授業内容や運用方法を検討し調整した。
がん看護学	本田 芳香 小原 泉	各学科目終了後、授業目標や内容の進行状況及び達成状況について、学生からの意見や要望の収集、学生の理解度の客観的な確認を随時行った。学生の学修課題達成状況をふまえて、担当教員や非常勤講師からも意見をきき授業内容や運用方法を検討・調整した。
地域看護管理学	春山 早苗	今年度開講した講義・演習科目について、学習目標の達成状況および担当教員の意見を踏まえ、次年度の授業改善に向けて検討した。
看護技術開発学	村上 礼子	学生の理解度、進捗状況を確認しながら、具体的理解につながるよう、必要な助言を行った。また、多くの教員からの助言がもらえるようゼミ形式での指導場面を多く設けた。さらに、研究指導に対する意見や要望を聴取し、その都度、授業内容や運営方法、スケジュール調整などの検討・調整を行った。学習目標の達成度について担当教員間で意見交換を行い、次年度の授業改善に向けて検討した。
老年看護管理学	宮林 幸江	学生の理解度を確認し、具象的内容を必要時には付加し授業を進めた。特に老年看護における視座、近未来の問題点について、熟思の姿勢を適宜強調・確認した。全体に学習意欲の維持を引き出すように努め、最後にレポート課題にて学修状況と自らの考えとを確認した。

2) 博士後期課程

(1) 専門関連科目

科目名	科目責任者	授業改善の取り組み
異文化精神医療論	大塚 公一郎	各回の講義後に、学生の講義の理解度や関心度を確認し、次回以降の講義内容、資料に反映するように試みた。
地域保健医療研究論	渡邊 亮一	未開講

(2) 専門科目

科目名	科目責任者	授業改善の取り組み
広域実践看護学特論Ⅰ ヘルスケアシステム研究法	春山 早苗	最終回において学生より授業への意見等を聴取した。これに学生の課題への取り組み状況および学習目標の達成状況を加えて、担当教員間で話し合い、次年度の授業改善に向けて検討した。
広域実践看護学特論Ⅱ クリニカルケア研究法	中村 美鈴	学生の到達目標に対する達成プロセスを把握しながら、適宜授業中および最終回には、授業内容や進め方について、意見や要望を訪ねた。さらに科目担当者と授業終了後に到達目標や運用方法について振り返り、学生の準備状況を踏まえ、より良い教授方法を検討し授業改善に努めた。
広域実践看護学特論Ⅲ メンタルヘルス研究法	半澤 節子	授業の到達目標を達成するため、学生の関心や研究テーマなどを適宜確認し、担当教員間で情報を共有した。適宜授業の中で、授業内容や進め方について、意見や要望を確認し、次年度の授業改善に向けて検討した。
広域実践看護学特論Ⅳ 看護教育・管理研究法	本田 芳香	授業の到達目標を達成するため、学生の既習状況および関心領域を確認し、科目担当者間で授業展開方法および課題内容を事前に検討しオリエンテーション資料を作成した。各授業終了後、学生に課題への取り組み状況および達成度について意見や感想をきき、授業改善に努めた。授業終了後は、科目担当者間で科目達成度および課題内容の取り組み状況について話し合い、次年度の授業改善に向けて検討した。
広域実践看護学演習 〈ヘルスケアシステム〉 〈クリニカルケア〉 〈看護教育・看護管理〉	半澤 節子	学生が選択した2つのテーマの担当教員と学生により、授業開始前に研究テーマなどを共有する時間を確保し、学生の進行状況に沿った助言ができるようにした。また、合同研究セミナーでの発表などからも研究の進行状況を把握し、担当教員間で情報交換に努め、次年度の授業改善に役立てた。
広域実践看護学特別研究	春山 早苗	今年度の修了生に研究活動や研究指導の感想・意見を聞き、次年度の研究指導の改善に向けて検討した。
	永井 優子	個別指導および合同研究セミナーから学生の進捗状況を把握し、学生や副研究指導教員からの意見と踏まえて研究指導に反映させた。論文作成にあたっては学生の勤務状況を確認しつつ、調整を試みたが、執筆と指導の時間を確保することに関する課題について次年度の指導に活かした。

	成田 伸	個別指導および合同研究セミナーから学生の進捗状況を把握し、研究指導に反映させている。
	中村 美鈴	個別指導およびゼミ指導、合同セミナーにおける学生の研究課題の明確化に至るプロセスと状況を丁寧に把握し、副指導教員と共に定期的に研究指導を行ったことを振り返り、より学生が主体的に取り組めるような教授方法を検討した。
	横山 由美	個別指導および合同研究セミナーから学生の考えを把握し、本年度の課題を学生と話し合い、次年度に向けて検討した。

5. 意見箱について

投稿された意見はなかった。